

第2回認証検討会（2024年2月14日）

資料7

いただいたお題

1. これまで取り組んできた点や、各機関に蓄積されている知見、さらにそれをどのように活用しうるか
 - 活用可能性を示す際には、第1回検討会で示した①～③のモデルケースの類型を踏まえて
2. 各主体（業・認定機関・認証機関・社会や国）が、日本でルールメイキングを浸透させていくうえですべき取組、その中でJSAがどのような役割を果たしていくか

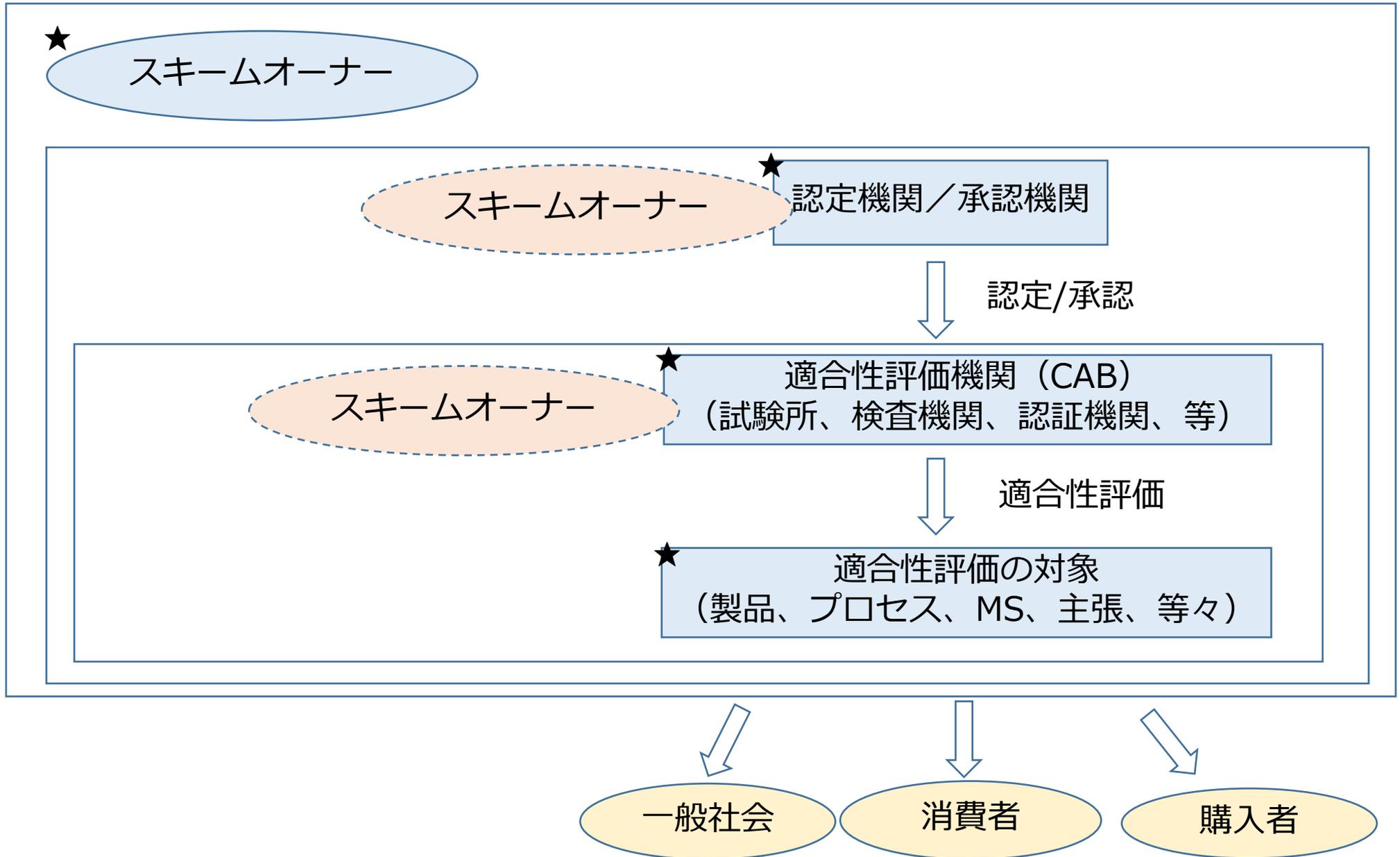
問題意識

- 標準化するだけでは十分ではない。その規格がグローバルに受け入れられるものにする必要がある
- グローバルに通用する認証スキームを構築できるかを意識しておく必要がある

(第1回検討会資料より)

- 認証（適合性評価）スキーム
- 標準がルールになって、他者を縛る／自らに従うように仕向けるためのインフラ
- 自身の目的に適う認証（適合性評価）スキームを設計／選択する必要がある

認証（適合性評価）スキーム ～誰がスキームを作るか/ スキームオーナーは誰



認証（適合性評価）スキームのパターン

スキーム
オーナー

規制当局

- EU : CE
マーク制度
- 日本 :
JISマーク制度、
JASマーク制度、
他

スキーム管理のための組織

- IAF/ILAC
- IEC CAB

有名な（ブランド）CAB/SDO

- UL, ASTM
- BSI
(Kitemark)

産業団体

- GFSI及び
recognized
scheme
owners
- IATF
- IAQG
- 国内産
業団体

TE認証

個社？

小口保冷
サービス

何をしなければならないか？（何ができていないか？）

-1	土壌作り： 認証（適合性評価）とは使える（人と費用をかける価値のある）ものだというカルチャーの醸成	社会
0	認証（適合性評価）の理解/知識、スキル： 個々のパーツの理解ではなく、スキーム（インフラ）としての理解、作れる/使いこなせるレベルのスキル	適合性評価関係者 企業
1	スキームの設計： 課題、標準化ニーズの設定の段階で、どのスキームに載せるべきかを検討	企業 あるいは、企業（黒幕）及びCAB
1.5	覚悟： 相応の“人”、“時間”、“費用”をかける覚悟をする	企業 CAB
2	スキームの開発、普及： <ul style="list-style-type: none"> • 規格開発 どんなスキームに載せるかによって、例えば、 <ul style="list-style-type: none"> • 強制法規への引用のためのロビイング • 産業団体への働きかけ/団体の設立 • 自らスキームオーナーになる、スキームオーナーへの働きかけ 	適合性評価関係者 企業